

アジア・太平洋研究センター主催講演会

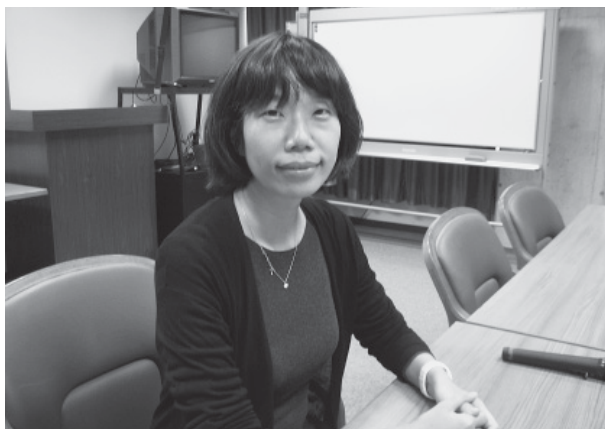
日 時：2013年11月18日（月）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：植民地台湾の断髪運動とその限界

——公文書・新聞記事・日記史料を手がかりとして——

報告者：許 時嘉（山形大学人文学部人間文化学科講師）



許 時嘉 氏

発表の構成

一、問題提起

1. 1910年代の断髪運動とその意義
2. 権力の争い場としての「断髪運動」とその限界
3. 植民地研究資料の相互参照の可能性

二、植民地初期の断髪政策（1895～1910年）

1. 具体的な政策面
2. 日本人知識人の断髪可否への議論（1900年）

三、新聞メディア言説空間の二極化（1911～1914年）

1. 肯定論：民族論回避，機能性重視
2. 否定論の位相

四、断髪活動における自発性の終焉—公的規範の傘下に収まるまで

1. 1910年代台湾社会における断髪実態
2. 断髪運動における公権力の登場とその背景

五、結び

本発表では、日本による植民地支配下の台湾、特に植民地統治前半期（1895～1915年前後）に焦点をあて、そこで繰り広げられた植民地政策と台湾民衆の対応について、具体的には断髪運動を手がかりとして論じられた。

まず「一、問題提起」では、本発表の目的と主な資料が紹介され、「二、植民地初期の断髪政策」では、1903年に後藤新平民政長官から出された通牒の分析などから、植民地政府が植民地住民の断髪については、強制しない方針を掲げていたことが説得的に論じられるとともに、主に1900年前後の『台湾経済雑誌』上で繰り広げられた、日本人知識人の断髪をめぐる論争についても紹介された。

次に「三、新聞メディア言説空間の二極化」では、『漢文台湾日日新聞』などを主な資料として、断髪をめぐる台湾人知識人内部の肯定論と否定論の対立について論じられ、さらに「四、断髪活動における自発性の終焉」では、被植民者である台湾人の自発的な活動として主に1910年代前半に展開した断髪運動が、1910年代中頃に公権力の介入によって急展開する様子が具体的に論じられた。そして最後に「五、結び」において、ここまで論じてきた台湾人の自発的断髪運動とその限界から、植民地内部における被植民者の自由とその限界をどのように考えるべきかという大変興味深い問題提起が行われ、本発表は締めくくられた。

（文責：松田 京子）